



## Red Hat Decision Manager 7.2

# Red Hat OpenShift Container Platform への Red Hat Decision Manager 試用環境のデプロイ メント

ガイド



# Red Hat Decision Manager 7.2 Red Hat OpenShift Container Platform への Red Hat Decision Manager 試用環境のデプロイメント

---

ガイド

Enter your first name here. Enter your surname here.

Enter your organisation's name here. Enter your organisational division here.

Enter your email address here.

## 法律上の通知

Copyright © 2023 | You need to change the HOLDER entity in the en-US/Deploying\_a\_Red\_Hat\_Decision\_Manager\_trial\_environment\_on\_Red\_Hat\_OpenShift\_Containerfile |.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux<sup>®</sup> is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java<sup>®</sup> is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS<sup>®</sup> is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL<sup>®</sup> is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js<sup>®</sup> is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack<sup>®</sup> Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

## 概要

本書は、Red Hat OpenShift Container Platform に Red Hat Process Automation Manager 7.2 試用環境をデプロイする方法を説明します。

## 目次

はじめに .....	3
第1章 RED HAT OPENSIFT CONTAINER PLATFORM における RED HAT DECISION MANAGER の概要 ....	4
第2章 イメージストリームとイメージレジストリーの可用性確認 .....	6
第3章 試用環境のデプロイ .....	8
第4章 OPENSIFT テンプレートの参考資料 .....	10
4.1. RHDM72-TRIAL-EPHEMERAL.YAML TEMPLATE .....	10
4.1.1. パラメーター .....	10
4.1.2. オブジェクト .....	22
4.1.2.1. サービス .....	22
4.1.2.2. ルート .....	23
4.1.2.3. デプロイメント設定 .....	23
4.1.2.3.1. トリガー .....	23
4.1.2.3.2. レプリカ .....	23
4.1.2.3.3. Pod テンプレート .....	24
4.1.2.4. 外部の依存関係 .....	42
4.1.2.4.1. シークレット .....	42
4.2. OPENSIFT の使用に関するクイックリファレンス .....	42
付録A バージョン情報 .....	44



## はじめに

システムエンジニアは、Red Hat OpenShift Container Platform に Red Hat Decision Manager 試用環境をデプロイして、ルールやその他のビジネスアセットの開発や使用を評価し、体験することができます。

### 前提条件

- 最低でも OpenShift クラスター/名前空間で 3 ギガバイト以上のメモリーが利用できる。
- デプロイメント用の OpenShift プロジェクトが作成されている。
- プロジェクトにログインするには、**oc** コマンドを使用します。**oc** コマンドランツールに関する詳細は、OpenShift の [CLI リファレンス](#) を参照してください。OpenShift Web コンソールを使用してテンプレートをデプロイするには、Web コンソールを使用してログインする必要があります。

## 第1章 RED HAT OPENSIFT CONTAINER PLATFORM における RED HAT DECISION MANAGER の概要

Red Hat Decision Manager は、Red Hat OpenShift Container Platform 環境にデプロイすることができます。

この場合、Red Hat Decision Manager のコンポーネントは、別の OpenShift Pod としてデプロイされます。各 Pod のスケールアップとダウンを個別に行い、特定のコンポーネントに必要な数だけコンテナを提供できます。標準の OpenShift の手法を使用して Pod を管理し、負荷を分散できます。

以下の Red Hat Decision Manager の主要コンポーネントが OpenShift で利用できます。

- Decision Server (**実行サーバー (Execution Server)** または **KIE Server** と呼ばれる) は、インフラストラクチャーの要素でデシジョンサービスやその他のデプロイ可能なアセットを実行します (これらすべてで総称で **サービス** と呼ぶ)。サービスのすべてのロジックは実行サーバーで実行されます。

Decision Server Pod は自由にスケールアップして、同一または異なるホストで実行するコピーに必要な数だけ提供できます。Pod をスケールアップまたはスケールダウンすると、そのコピーはすべて同じプロセスで実行します。OpenShift は負荷分散を提供しているため、要求はどの Pod でも処理できます。

個別の Decision Server Pod をデプロイして、異なるサービスグループを実行することができます。この Pod もスケールアップやスケールダウンが可能です。個別の複製 Decision Server Pod を必要な数だけ設定することができます。

- Decision Central は、オーサリングサービス用の Web ベースの対話環境で、Decision Central では管理コンソールが提供されています。Business Central は管理コンソールも提供します。Decision Central を使用してサービスを開発し、Decision Server にデプロイできます。Decision Central は集中型アプリケーションです。複数の Pod を実行し、同じデータを共有する高可用性用に設定できます。

Decision Central には開発するサービスのソースを保管する Git リポジトリが含まれます。また、ビルトインの Maven リポジトリも含まれます。設定に応じて、Decision Central はコンパイルしたサービス (KJAR ファイル) をビルドイン Maven リポジトリに配置できます (設定した場合は外部 Maven リポジトリにも可能)。



### 重要

現在のバージョンでは、Decision Central の高可用性機能はテクノロジープレビューです。

OpenShift 内でさまざまな環境設定にこのコンポーネントおよびその他のコンポーネントを配置できます。

以下の環境タイプが一般的です。

- オーサリングまたは管理対象の環境:** Decision Central 経由でサービスの作成や変更、Decision Server でのサービスの実行に使用可能な環境のアーキテクチャー。この環境は、オーサリング作業用の Decision Central を提供する Pod と、サービス実行用の Decision Server 1 つまたは複数を提供する Pod で設定されます。Decision Server それぞれが 1 つの Pod となっており、必要に応じてスケールアップやスケールダウンすることで複製が可能です。Decision Central を使用して、各 Decision Server にサービスをデプロイおよびアンデプロイできます。この環境をデプロイする方法については、[Red Hat OpenShift Container Platform への Red Hat Decision Manager オーサリングまたは管理サーバー環境のデプロイ](#) を参照してください。



- **イミュータブルサーバーを使用するデプロイメント**: ステージングおよび実稼働目的で既存のサービスを実行するための代替の環境です。この環境では、Process Server の Pod のデプロイ時に、サービスまたはサービスグループをロードおよび起動するイメージをビルドします。この Pod でサービスを停止したり、新しいサービスを追加したりすることはできません。サービスの別のバージョンを使用したり、別の方法で設定を変更する必要がある場合は、新規のサーバーイメージをデプロイして、古いサーバーと入れ替えます。このシステムでは、Decision Server は OpenShift 環境の他の Pod のように実行されるので、コンテナベースの統合ワークフローはどれでも使用でき、別のツールを使用して Pod を管理する必要はありません。このような環境のデプロイメント手順は、[Red Hat OpenShift Container Platform への Red Hat Decision Manager イミュータブルサーバー環境のデプロイメント](#) を参照してください。

**試用** または評価環境をデプロイすることも可能です。この環境には、Decision Central と Decision Server が含まれます。この環境はすばやく設定でき、これを使用して、アセットの開発や実行を評価し、体験できます。ただし、この環境では永続ストレージを使用せず、この環境でのいずれの作業も保存されません。この環境のデプロイ方法については、[Red Hat OpenShift Container Platform への Red Hat Decision Manager 試用環境のデプロイ](#) を参照してください。

OpenShift に Red Hat Decision Manager 環境をデプロイするには、Red Hat Decision Manager で用意した OpenShift テンプレートを使用します。

## 第2章 イメージストリームとイメージレジストリーの可用性確認

Red Hat OpenShift Container Platform で Red Hat Decision Manager コンポーネントをデプロイするには、OpenShift が Red Hat レジストリーから正しいイメージをダウンロードできるようにする必要があります。これらのイメージをダウンロードするには、OpenShift ではイメージの場所情報（イメージストリームと呼ばれる）が必要です。また、OpenShift は、お使いのサービスアカウントのユーザー名とパスワードを使用して Red Hat レジストリーへの認証が行われるように設定する必要があります。

OpenShift 環境のバージョンによっては、必要なイメージストリームが含まれている場合があります。イメージストリームが提供されているかどうかを確認する必要があります。デフォルトでイメージストリームが OpenShift に含まれている場合は、OpenShift インフラストラクチャーがレジストリー認証サーバー用に設定されているのであれば、使用できます。管理者は、OpenShift 環境のインストール時に、レジストリーの認証設定を完了する必要があります。

それ以外の場合には、独自のプロジェクトでレジストリーの認証を設定して、その同じプロジェクト内にイメージストリームをインストールすることができます。

### 手順

1. Red Hat OpenShift Container Platform が Red Hat レジストリーへのアクセス用に、ユーザー名とパスワードで設定されているかを判断します。必須の設定に関する詳細は、[レジストリーの場所の設定](#) を参照してください。OpenShift オンラインサブスクリプションを使用する場合は、Red Hat レジストリー用のアクセスはすでに設定されています。
2. Red Hat OpenShift Container Platform は、Red Hat のレジストリーアクセス用にユーザー名とパスワードで設定する場合には、以下のコマンドを使用します。

```
$ oc get imagestreamtag -n openshift | grep rhdm72-decisioncentral-openshift
$ oc get imagestreamtag -n openshift | grep rhdm72-kieserver-openshift
```

両コマンドの出力が空でない場合は、必要なイメージストリームが **openshift** namespace にあるため、これ以外の操作は必要ありません。

3. コマンドの1つまたは複数の出力が空白の場合や、Red Hat レジストリーにアクセスするために、OpenShift をユーザー名およびパスワードで設定していない場合は、以下の手順を実行してください。
  - a. **oc** コマンドで OpenShift にログインして、プロジェクトがアクティブであることを確認します。
  - b. [Registry Service Accounts for Shared Environments](#) で説明されている手順を実行します。Red Hat カスタマーポータルにログインして、このドキュメントにアクセスし、レジストリーサービスアカウントを作成する手順を実行します。
  - c. **OpenShift Secret** タブを選択し、**Download secret** のリンクをクリックして、YAML シークレットファイルをダウンロードします。
  - d. ダウンロードしたファイルを確認して、**name:** エントリーに記載の名前をメモします。
  - e. 以下のコマンドを実行します。

```
oc create -f <file_name>.yaml
oc secrets link default <secret_name> --for=pull
oc secrets link builder <secret_name> --for=pull
```

<file\_name> はダウンロードしたファイルに、<secret\_name> はファイルの **name:** のエントリーに記載されている名前に置き換えてください。

- f. **Software Downloads** ページから [rhdm-7.2.0-openshift-templates.zip](#) 製品の配信可能ファイルをダウンロードし、**rhdm72-image-streams.yaml** ファイルを展開してください。
- g. 以下のアクションの1つを完了します。
  - 次のコマンドを実行します。

```
$ oc create -f rhdm72-image-streams.yaml
```

- OpenShift Web UI で **Add to Project → Import YAML / JSON** を選択し、ファイルを選択するか、ファイルの内容を貼り付けます。



#### 注記

上記の手順を完了したら、イメージストリームを独自のプロジェクトの名前空間にインストールします。この手順を使用してイメージストリームをインストールした場合には、テンプレートのデプロイ時に、**IMAGE\_STREAM\_NAMESPACE** パラメーターをこのプロジェクトの名前に設定する必要があります。

## 第3章 試用環境のデプロイ

試用版 (評価版) の Red Hat Decision Manager 環境をデプロイできます。この環境には、サービスのオーサリングと管理を行う Decision Central とサービスのテストを実行する Decision Server で設定されます。

この環境には、永続ストレージが含まれません。トライアル環境で作成または変更するアセットは保存されません。

この環境は、テストおよびデモ用のアクセスを前提として設計されています。CORS (Cross-Origin Resource Sharing) をサポートします。これは、ページの他のリソースが他のサーバーによって提供される場合に、ブラウザを使用して Decision Server エンドポイントにアクセスできることを意味します。Decision Server エンドポイントは通常 REST 呼び出しを対象としていますが、一部のデモ設定でブラウザアクセスが必要になることがあります。

手順は最小限です。必須の設定はなく、すべてのパスワードは単一の値に設定されています (デフォルトのパスワードは **RedHat** です)。

トライアル環境をデプロイするには、**rhdm72-trial-ephemeral.yaml** テンプレートファイルを使用します。**rhdm-7.2.0-openshift-templates.zip** の製品配信可能ファイルからこのファイルを展開できます。このファイルは、Red Hat カスタマーポータル [の Software Downloads](#) ページからダウンロードできます。

### 手順

1. 以下の方法を使用してテンプレートをデプロイします。

- OpenShift Web UI では、**Add to Project** → **Import YAML / JSON** を選択し、**rhdm72-trial-ephemeral.yaml** ファイルを選択するか、その内容を貼り付けます。**Add Template** ウィンドウで、**Process the template** が選択されていることを確認し、**Continue** をクリックします。
- OpenShift コマンドラインコンソールを使用するには、以下のコマンドラインを準備します。

```
oc new-app -f <template-path>/rhdm72-trial-ephemeral.yaml
```

このコマンドラインでは、**<template-path>** は、ダウンロードしたテンプレートファイルのパスに置き換えます。

2. 必要に応じて、このテンプレートに記載されているようにパラメーターを設定します。通常の試用版の開発では、以下のパラメーターのみが必要です。

- **ImageStream 名前空間 (IMAGE\_STREAM\_NAMESPACE)**: イメージストリームが利用可能な名前空間。OpenShift 環境でイメージストリームが利用可能な場合 ([2章 イメージストリームとイメージレジストリーの可用性確認](#) を参照) は、namespace が **openshift** になります。イメージストリームファイルをインストールした場合は、名前空間が OpenShift プロジェクトの名前になります。

3. 使用している方法に応じて、環境の作成を終了します。

- OpenShift Web UI の場合は **Create** をクリックします。
  - **This will create resources that may have security or project behavior implications** のポップアップメッセージが表示される可能性があります。このメッセージが表示された場合は、**Create Anyway** をクリックします。

- 完了し、コマンドラインを実行します。

## 第4章 OPENSIFT テンプレートの参考資料

Red Hat Decision Manager には、以下の OpenShift テンプレートが含まれています。このテンプレートにアクセスするには、Red Hat カスタマーポータルでの [Software Downloads](#) ページから、製品の配信可能ファイル `rhdm-7.2.0-openshift-templates.zip` をダウンロードして展開します。

- rhdm72-trial-ephemeral.yaml** は、Decision Central と、Decision Central に接続された Decision Server を提供します。この環境では、永続ストレージのない一時的な設定を使用します。このテンプレートの詳細は、「[rhdm72-trial-ephemeral.yaml template](#)」を参照してください。

### 4.1. RHDM72-TRIAL-EPHEMERAL.YAML TEMPLATE

Red Hat Decision Manager 7.2 の一時オーサリングおよびテスト環境向けのアプリケーションテンプレート

#### 4.1.1. パラメーター

テンプレートを使用すると値を引き継ぐパラメーターを定義でき、パラメーターの参照時には、この値が代入されます。この値は、パラメーターの参照時には、この値が代入されます。参照はオブジェクト一覧フィールドの任意のテキストフィールドで定義できます。詳細は、[Openshift ドキュメント](#) を参照してください。

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>APPLICATION_NAME</b>	–	アプリケーションの名前。	myapp	True
<b>DEFAULT_PASSWORD</b>	<b>KIE_ADMIN_PASSWORD</b>	この試用版の環境でユーザーが簡単に試用できるように、複数のコンポーネントで使用されるデフォルトのパスワード	RedHat	True
<b>KIE_ADMIN_USER</b>	<b>KIE_ADMIN_USER</b>	KIE 管理者のユーザー名	adminUser	False
<b>KIE_SERVER_USER</b>	<b>KIE_SERVER_USER</b>	KIE サーバーのユーザー名 (org.kie.server.user システムプロパティを設定します)	executionUser	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>KIE_SERVER_BYPASS_AUTH_USER</b>	<b>KIE_SERVER_BYPASS_AUTH_USER</b>	KIE サーバーのバイパス認証ユーザー (org.kie.server.bypass.auth.user システムプロパティを設定します)	false	False
<b>KIE_SERVER_CONTROLLER_USER</b>	<b>KIE_SERVER_CONTROLLER_USER</b>	KIE サーバーのコントローラーのユーザー名 (org.kie.server.controller.user システムプロパティを設定します)	controllerUser	False
<b>KIE_MBEANS</b>	<b>KIE_MBEANS</b>	KIE Server の mbeans の有効化/無効化 (システムプロパティ kie.mbeans および kie.scanner.mbeans を設定)。	enabled	False
<b>DROOLS_SERVER_FILTER_CLASSES</b>	<b>DROOLS_SERVER_FILTER_CLASSES</b>	KIE Server のクラスフィルター (org.drools.server.filter.classes システムプロパティを設定)	true	False
<b>KIE_SERVER_HOSTNAME_HTTP</b>	<b>HOSTNAME_HTTP</b>	http サービスルートのカスタムホスト名。デフォルトホスト名の場合は空白にします (例: <application-name>-kieserver-<project>.<default-domain-suffix>)。	—	False
<b>KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_ORIGIN</b>	<b>AC_ALLOW_ORIGIN_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE</b>	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Origin 応答のヘッダーの値を設定します (CORS サポートに有用)	*	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_METHODS</b>	<b>AC_ALLOW_METHODS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE</b>	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Methods 応答のヘッダーの値を設定します (CORS サポートに有用)	GET、POST、OPTIONS、PUT	False
<b>KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_HEADERS</b>	<b>AC_ALLOW_HEADERS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE</b>	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Headers 応答のヘッダーの値を設定します (CORS サポートに有用)	Accept、Authorization、Content-Type、X-Requested-With	False
<b>KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_CREDENTIALS</b>	<b>AC_ALLOW_CREDENTIALS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE</b>	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Credentials 応答のヘッダーの値を設定します (CORS サポートに有用)	true	False
<b>KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_MAX_AGE</b>	<b>AC_MAX_AGE_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE</b>	KIE サーバーの Access-Control-Max-Age 応答のヘッダーの値を設定します (CORS サポートに有用)	1	False
<b>DECISION_CENTRAL_HOSTNAME_HTTP</b>	<b>HOSTNAME_HTTP</b>	http サービスルートのカスタムホスト名。デフォルトのホスト名を使用する場合には空白にします (例: <application-name>-rhdmcentr-<project>.<default-domain-suffix>)。	–	False



変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>IMAGE_STREAM_NAMESPACE</b>	–	Red Hat ミドルウェアイメージの ImageStreams がインストールされている namespace これらの ImageStreams は通常 OpenShift の名前空間にインストールされています。ImageStreams を別の namespace/プロジェクトにインストールしている場合には、これを変更するだけで結構です。	openshift	True
<b>KIE_SERVER_IMAGE_STREAM_NAME</b>	–	KIE Server に使用するイメージストリームの名前。デフォルトは "rhdm72-kieserver-openshift" です。	rhdm72-kieserver-openshift	True
<b>IMAGE_STREAM_TAG</b>	–	イメージストリーム内のイメージへの名前付きポインター。デフォルトは 1.1 です。	1.1	True
<b>KIE_SERVER_CONTAINER_DEPLOYMENT</b>	<b>KIE_SERVER_CONTAINER_DEPLOYMENT</b>	KIE サーバーコンテナのデプロイメント設定。形式: containerId=groupId:artifactId:version  c2=g2:a2:v2	–	False
<b>MAVEN_REPO_ID</b>	<b>MAVEN_REPO_ID</b>	maven リポジトリに使用する id (設定されている場合)。デフォルトは無作為に作成されます。	my-repo-id	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>MAVEN_REPO_URL</b>	<b>MAVEN_REPO_URL</b>	Maven リポジトリまたはサービスへの完全修飾 URL。	<a href="http://nexus.nexus-project.svc.cluster.local:8081/nexus/content/groups/public/">http://nexus.nexus-project.svc.cluster.local:8081/nexus/content/groups/public/</a>	False
<b>MAVEN_REPO_USERNAME</b>	<b>MAVEN_REPO_USERNAME</b>	Maven リポジトリにアクセスするユーザー名 (必要な場合)	–	False
<b>MAVEN_REPO_PASSWORD</b>	<b>MAVEN_REPO_PASSWORD</b>	Maven リポジトリにアクセスするパスワード (必要な場合)。	–	False
<b>DECISION_CENTRAL_MAVEN_USERNAME</b>	<b>KIE_MAVEN_USER</b>	EAP 内の Decision Central がホストする Maven サービスにアクセスするためのユーザー名	mavenUser	True
<b>GIT_HOOKS_DIR</b>	<b>GIT_HOOKS_DIR</b>	git フックに使用するディレクトリ (必要な場合)。	<b>/opt/eap/standalone/data/kie/git/hooks</b>	False
<b>DECISION_CENTRAL_MEMORY_LIMIT</b>	–	Decision Central コンテナのメモリ制限	2 Gi	False
<b>KIE_SERVER_MEMORY_LIMIT</b>	–	KIE Server のコンテナのメモリ制限	1Gi	False
<b>SSO_URL</b>	<b>SSO_URL</b>	RH-SSO URL	<a href="https://rh-sso.example.com/auth">https://rh-sso.example.com/auth</a>	False
<b>SSO_REALM</b>	<b>SSO_REALM</b>	RH-SSO レalm 名。	–	False
<b>DECISION_CENTRAL_SSO_CLIENT</b>	<b>SSO_CLIENT</b>	Decision Central RH-SSO クライアント名。	–	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>DECISION_CENTRAL_SSO_SECRET</b>	<b>SSO_SECRET</b>	Decision Central RH-SSO クライアントシークレット	252793ed-7118-4ca8-8dab-5622fa97d892	False
<b>KIE_SERVER_SSO_CLIENT</b>	<b>SSO_CLIENT</b>	KIE Server の RH-SSO クライアント名。	–	False
<b>KIE_SERVER_SSO_SECRET</b>	<b>SSO_SECRET</b>	KIE Server の RH-SSO クライアントシークレット	252793ed-7118-4ca8-8dab-5622fa97d892	False
<b>SSO_USERNAME</b>	<b>SSO_USERNAME</b>	クライアント作成に使用する RH-SSO レルムの管理者のユーザー名 (存在しない場合)	–	False
<b>SSO_PASSWORD</b>	<b>SSO_PASSWORD</b>	クライアント作成に使用する RH-SSO レルムの管理者のパスワード。	–	False
<b>SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION</b>	<b>SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION</b>	RH-SSO が無効な SSL 証明書の検証。	false	False
<b>SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE</b>	<b>SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE</b>	ユーザー名として使用する RH-SSO プリンシパル属性	preferred_username	False
<b>AUTH_LDAP_URL</b>	<b>AUTH_LDAP_URL</b>	認証用に接続する LDAP エンドポイント	ldap://myldap.example.com	False
<b>AUTH_LDAP_BIND_DN</b>	<b>AUTH_LDAP_BIND_DN</b>	認証に使用するバインド DN。	uid=admin,ou=users,ou=example,ou=com	False
<b>AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL</b>	<b>AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL</b>	認証に使用する LDAP の認証情報。	パスワード	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN</b>	<b>AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN</b>	パスワードの復号に使用する JaasSecurityDomain の JMX ObjectName。	–	False
<b>AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN</b>	<b>AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN</b>	ユーザー検索を開始する最上位コンテキストの LDAP ベース DN	ou=users,ou=example,ou=com	False
<b>AUTH_LDAP_BASE_FILTER</b>	<b>AUTH_LDAP_BASE_FILTER</b>	認証するユーザーのコンテキストの検索に使用する LDAP 検索フィルター。{0} 式を使用しているフィルターに、入力ユーザー名、またはログインモジュールコールバックから取得した userDN が置換されます。検索フィルターの一般的な例は (uid={0}) です。	(uid={0})	False
<b>AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE</b>	<b>AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE</b>	使用する検索範囲。	<b>SUBTREE_SCOPE</b>	False
<b>AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT</b>	<b>AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT</b>	ユーザーまたはロールの検索のタイムアウト (ミリ秒単位)。	10000	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE</b>	<b>AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE</b>	ユーザーの DN を含むユーザーエントリーの属性の名前。これは、ユーザー自身の DN に正しいユーザーマッピングを妨げる特殊文字 (バックスラッシュなど) が含まれる場合に必要になることがあります。属性が存在しない場合は、エントリーの DN が使用されます。	distinguishedName	False
<b>AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME</b>	<b>AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME</b>	DN がユーザー名に対して解析されるかどうかを示すフラグ。true に設定した場合には、DN はユーザー名に対して解析されます。false に設定した場合には、DN はユーザー名に対して解析されません。このオプションは、usernameBeginString および usernameEndString とともに使用されます。	true	False
<b>AUTH_LDAP_USERNAME_BEGIN_STRING</b>	<b>AUTH_LDAP_USERNAME_BEGIN_STRING</b>	ユーザー名を公開するため、DN の最初から削除される文字列を定義します。このオプションは usernameEndString と合わせて使用し、parseUsername が true に設定されている場合にのみ考慮されます。	-	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>AUTH_LDAP_USERNAME_END_STRING</b>	<b>AUTH_LDAP_USERNAME_END_STRING</b>	ユーザー名を公開するため、DNの最後から削除される文字列を定義します。このオプションは <code>usernameEndString</code> と合わせて使用し、 <code>parseUsername</code> が <code>true</code> に設定されている場合にのみ考慮されます。	–	False
<b>AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID</b>	ユーザーロールを含む属性の名前。	<code>memberOf</code>	False
<b>AUTH_LDAP_ROLE_CONTEXT_DN</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_CONTEXT_DN</b>	ユーザーロールを検索するコンテキストの固定 DN。これは、実際のロールが存在する DN ではなく、ユーザーロールを含むオブジェクトが存在する DN です。たとえば、Microsoft Active Directory サーバーでは、これは、ユーザーアカウントが存在する DN です。	<code>ou=groups,ou=example,ou=com</code>	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>AUTH_LDAP_ROLE_FILTER</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_FILTER</b>	認証済みユーザーと関連付けられたロールを検索するために使用される検索フィルター。 {0} 式を使用しているフィルターに、入力ユーザー名、またはログインモジュールコールバックから取得した userDN が置換されます。認証済み userDN は {} が使用されたフィルターに置き換えられます。入力ユーザー名に一致する検索フィルター例は (member={0}) です。認証済み userDN に一致する他の例は (member={1}) です。	(memberOf={1})	False
<b>AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION</b>	ロール検索が一致するコンテキストで行われる再帰のレベル数。再帰を無効にするには、これを 0 に設定します。	1	False
<b>AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE</b>	<b>AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE</b>	認証された全ユーザーに対して含まれるロール	guest	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID</b>	ロール名を含む roleCtxDN コンテキスト内の属性の名前。 roleAttributeIsDN プロパティを true に設定すると、このプロパティはロールオブジェクトの名前属性の検索に使用されます。	name	False
<b>AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN</b>	<b>AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN</b>	クエリーによって返された DN に roleNameAttributeID が含まれるかどうかを示すフラグ。true に設定した場合には、DN は roleNameAttributeID に対してチェックされます。false に設定すると、DN は roleNameAttributeID に対して確認されません。このフラグは LDAP クエリーのパフォーマンスを向上できます。	false	False



変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN</b>	roleAttributeID にロールオブジェクトの完全修飾 DN が含まれるかどうか。false の場合は、コンテキスト名の roleNameAttributeId 属性の値からこのロール名が取得されます。Microsoft Active Directory などの特定のディレクトリースキーマでは、この属性を true に設定する必要があります。	false	False
<b>AUTH_LDAP_REFERRAL_USE_R_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK</b>	<b>AUTH_LDAP_REFERRAL_USE_R_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK</b>	リファーラル (referral) を使用しない場合はこのオプションを使用する必要はありません。リファーラルを使用し、ロールオブジェクトがリファーラル内部にあると、このオプションは特定のロール (例: member) に対して定義されたユーザーが含まれる属性名を示します。ユーザーはこの属性名の内容に対して確認されます。このオプションが設定されていないとチェックは常に失敗するため、ロールオブジェクトはリファーラルツリーに保存できません。	-	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
<b>AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES</b>	<b>AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES</b>	このパラメーターがある場合には、RoleMapping のログインモジュールで、指定したファイルを使用するように設定します。このプロパティーは、ロールを置換ロールに対してマップするプロパティーファイルまたはリソースの完全修飾ファイルパスまたはファイル名を定義します。形式は original_role=role1,role2,role3 になります。	–	False
<b>AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE</b>	<b>AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE</b>	現在のロールを追加するか、マップされたロールに現在のロールを置き換えるか。true に設定した場合は、置き換えられます。	–	False

## 4.1.2. オブジェクト

CLI はさまざまなオブジェクトタイプをサポートします。これらのオブジェクトタイプの一覧や略語については、[Openshift ドキュメント](#) を参照してください。

### 4.1.2.1. サービス

サービスは、Pod の論理セットや、Pod にアクセスするためのポリシーを定義する抽象概念です。詳細は、[コンテナエンジンのドキュメント](#) を参照してください。

サービス	ポート	名前	説明
<b>\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr</b>	8080	http	すべての Decision Central Web サーバーのポート
	8001	git-ssh	

サービス	ポート	名前	説明
<code>\${APPLICATION_NAME}-kieserver</code>	8080	-	すべての KIE Server Web サーバーのポート。

#### 4.1.2.2. ルート

ルートとは、**www.example.com** など、外部から到達可能なホスト名を指定して、サービスを公開する手段です。ルーターは、定義したルートや、サービスで特定したエンドポイントを使用して、外部のクライアントからアプリケーションに名前付きの接続を提供します。各ルートは、ルート名、サービスセレクター、セキュリティ設定 (任意) で設定されます。詳細は、[Openshift ドキュメント](#) を参照してください。

サービス	セキュリティ	Hostname
<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr-http</code>	none	<code>\${DECISION_CENTRAL_HOSTNAME_HTTP}</code>
<code>\${APPLICATION_NAME}-kieserver-http</code>	なし	<code>\${KIE_SERVER_HOSTNAME_HTTP}</code>

#### 4.1.2.3. デプロイメント設定

OpenShift のデプロイメントは、デプロイメント設定と呼ばれるユーザー定義のテンプレートをもとにするレプリケーションコントローラーです。デプロイメントは手動で作成されるか、トリガーされたイベントに対応するために作成されます。詳細は、[Openshift ドキュメント](#) を参照してください。

##### 4.1.2.3.1. トリガー

トリガーは、OpenShift 内外を問わず、イベントが発生すると新規デプロイメントを作成するように促します。詳細は、[Openshift ドキュメント](#) を参照してください。

Deployment	トリガー
<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr</code>	ImageChange
<code>\${APPLICATION_NAME}-kieserver</code>	ImageChange

##### 4.1.2.3.2. レプリカ

レプリケーションコントローラーを使用すると、指定した数だけ、Pod のレプリカを一度に実行させることができます。レプリカが増えると、レプリケーションコントローラーが Pod の一部を終了させます。レプリカが足りない場合には、起動させます。詳細は、[コンテナエンジンのドキュメント](#) を参照してください。

Deployment	レプリカ
<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr</code>	1
<code>\${APPLICATION_NAME}-kieserver</code>	1

#### 4.1.2.3.3. Pod テンプレート

##### 4.1.2.3.3.1. サービスアカウント

サービスアカウントは、各プロジェクト内に存在する API オブジェクトです。他の API オブジェクトのように作成し、削除できます。詳細は、[OpenShift ドキュメント](#) を参照してください。

Deployment	サービスアカウント
<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr</code>	<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmsvc</code>
<code>\${APPLICATION_NAME}-kieserver</code>	<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmsvc</code>

##### 4.1.2.3.3.2. イメージ

デプロイメント	イメージ
<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr</code>	<code>rhdm72-decisioncentral-openshift</code>
<code>\${APPLICATION_NAME}-kieserver</code>	<code>\${KIE_SERVER_IMAGE_STREAM_NAME}</code>

##### 4.1.2.3.3.3. Readiness Probe

###### `${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr`

```
/bin/bash -c curl --fail --silent -u '${KIE_ADMIN_USER}:${DEFAULT_PASSWORD}'
http://localhost:8080/kie-drools-wb.jsp
```

###### `${APPLICATION_NAME}-kieserver`

```
/bin/bash -c curl --fail --silent -u ${KIE_ADMIN_USER}:${DEFAULT_PASSWORD}
http://localhost:8080/services/rest/server/readycheck
```

##### 4.1.2.3.3.4. Liveness Probe

###### `${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr`

```
/bin/bash -c curl --fail --silent -u '${KIE_ADMIN_USER}:${DEFAULT_PASSWORD}'
http://localhost:8080/kie-drools-wb.jsp
```

**`\${APPLICATION\_NAME}-kieserver**

```
/bin/bash -c curl --fail --silent -u ${KIE_ADMIN_USER}:${DEFAULT_PASSWORD}
http://localhost:8080/services/rest/server/readycheck
```

## 4.1.2.3.3.5. 公開されたポート

デプロイメント	名前	ポート	プロトコル
<b>`\${APPLICATION_NAME}-rhdmcenr</b>	jolokia	8778	<b>TCP</b>
	http	8080	<b>TCP</b>
	git-ssh	8001	<b>TCP</b>
<b>`\${APPLICATION_NAME}-kieserver</b>	jolokia	8778	<b>TCP</b>
	http	8080	<b>TCP</b>

## 4.1.2.3.3.6. イメージの環境変数

デプロイメント	変数名	説明	値の例
<b>`\${APPLICATION_NAME}-rhdmcenr</b>	<b>KIE_ADMIN_USER</b>	KIE 管理者のユーザー名	<b>`\${KIE_ADMIN_USER}</b>
	<b>KIE_ADMIN_PWD</b>	この試用版の環境でユーザーが簡単に試用できるように、複数のコンポーネントで使用されるデフォルトのパスワード	<b>`\${DEFAULT_PASSWORD}</b>
	<b>KIE_MBEANS</b>	KIE Server の mbeans の有効化/無効化 (システムプロパティー kie.mbeans および kie.scanner.mbeans を設定)。	<b>`\${KIE_MBEANS}</b>
	<b>KIE_SERVER_CONTROLLER_USER</b>	KIE サーバーのコントローラーのユーザー名 (org.kie.server.controller.user システムプロパティーを設定します)	<b>`\${KIE_SERVER_CONTROLLER_USER}</b>
	<b>KIE_SERVER_CONTROLLER_PWD</b>	この試用版の環境でユーザーが簡単に試用できるように、複数のコンポーネントで使用されるデフォルトのパスワード	<b>`\${DEFAULT_PASSWORD}</b>

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b>KIE_SERVER_USER</b>	KIE サーバーのユーザー名 (org.kie.server.user システムプロパティを設定します)	<b>`\${KIE_SERVER_USER}`</b>
	<b>KIE_SERVER_PWD</b>	この試用版の環境でユーザーが簡単に試用できるように、複数のコンポーネントで使用されるデフォルトのパスワード	<b>`\${DEFAULT_PASSWORD}`</b>
	<b>WORKBENCH_ROUTE_NAME</b>	–	<b>`\${APPLICATION_NAME}-rhdmcen</b>
	<b>MAVEN_REPO_ID</b>	maven リポジトリに使用する id (設定されている場合)。デフォルトは無作為に作成されます。	<b>`\${MAVEN_REPO_ID}`</b>
	<b>MAVEN_REPO_URL</b>	Maven リポジトリまたはサービスへの完全修飾 URL。	<b>`\${MAVEN_REPO_URL}`</b>
	<b>MAVEN_REPO_USERNAME</b>	Maven リポジトリにアクセスするユーザー名 (必要な場合)	<b>`\${MAVEN_REPO_USERNAME}`</b>
	<b>MAVEN_REPO_PASSWORD</b>	Maven リポジトリにアクセスするパスワード (必要な場合)。	<b>`\${MAVEN_REPO_PASSWORD}`</b>
	<b>KIE_MAVEN_USER</b>	EAP 内の Decision Central がホストする Maven サービスにアクセスするためのユーザー名	<b>`\${DECISION_CENTRAL_MAVEN_USERNAME}`</b>
	<b>KIE_MAVEN_PWD</b>	この試用版の環境でユーザーが簡単に試用できるように、複数のコンポーネントで使用されるデフォルトのパスワード	<b>`\${DEFAULT_PASSWORD}`</b>
	<b>GIT_HOOKS_DIR</b>	git フックに使用するディレクトリ (必要な場合)。	<b>`\${GIT_HOOKS_DIR}`</b>
	<b>SSO_URL</b>	RH-SSO URL	<b>`\${SSO_URL}`</b>

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b>SSO_OPENIDCONNECT_DEPLOYMENTS</b>	–	ROOT.war
	<b>SSO_REALM</b>	RH-SSO レルム名。	<b>\${SSO_REALM}</b>
	<b>SSO_SECRET</b>	Decision Central RH-SSO クライアントシークレット	<b>\${DECISION_CENTRAL_SSO_SECRET}</b>
	<b>SSO_CLIENT</b>	Decision Central RH-SSO クライアント名。	<b>\${DECISION_CENTRAL_SSO_CLIENT}</b>
	<b>SSO_USERNAME</b>	クライアント作成に使用する RH-SSO レルムの管理者のユーザー名 (存在しない場合)	<b>\${SSO_USERNAME}</b>
	<b>SSO_PASSWORD</b>	クライアント作成に使用する RH-SSO レルムの管理者のパスワード。	<b>\${SSO_PASSWORD}</b>
	<b>SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION</b>	RH-SSO が無効な SSL 証明書の検証。	<b>\${SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION}</b>
	<b>SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE</b>	ユーザー名として使用する RH-SSO プリンシパル属性	<b>\${SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE}</b>
	<b>HOSTNAME_HTTP</b>	http サービスルートのカスタムホスト名。デフォルトのホスト名を使用する場合には空白にします (例: <application-name>-rhdmcenr-<project>.<default-domain-suffix>)。	<b>\${DECISION_CENTRAL_HOSTNAME_HTTP}</b>
	<b>AUTH_LDAP_URL</b>	認証用に接続する LDAP エンドポイント	<b>\${AUTH_LDAP_URL}</b>
	<b>AUTH_LDAP_BIND_DN</b>	認証に使用するバインド DN。	<b>\${AUTH_LDAP_BIND_DN}</b>

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b>AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL</b>	認証に使用する LDAP の認証情報。	<b>`\${AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN</b>	パスワードの復号に使用する JaasSecurityDomain の JMX ObjectName。	<b>`\${AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN</b>	ユーザー検索を開始する最上位コンテキストの LDAP ベース DN	<b>`\${AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_BASE_FILTER</b>	認証するユーザーのコンテキストの検索に使用する LDAP 検索フィルター。{0} 式を使用しているフィルターに、入力ユーザー名、またはログインモジュールコールバックから取得した userDN が置換されます。検索フィルターの一般的な例は (uid={0}) です。	<b>`\${AUTH_LDAP_BASE_FILTER}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE</b>	使用する検索範囲。	<b>`\${AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT</b>	ユーザーまたはロールの検索のタイムアウト (ミリ秒単位)。	<b>`\${AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE</b>	ユーザーの DN を含むユーザーエントリーの属性の名前。これは、ユーザー自身の DN に正しいユーザーマッピングを妨げる特殊文字 (バックslash など) が含まれる場合に必要になることがあります。属性が存在しない場合は、エントリーの DN が使用されます。	<b>`\${AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE}`</b>



デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b>AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME</b>	DN がユーザー名に対して解析されるかどうかを示すフラグ。true に設定した場合には、DN はユーザー名に対して解析されます。false に設定した場合には、DN はユーザー名に対して解析されません。このオプションは、usernameBeginString および usernameEndString とともに使用されます。	<b>`\${AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_USERNAME_BEGIN_STRING</b>	ユーザー名を公開するため、DN の最初から削除される文字列を定義します。このオプションは usernameEndString と合わせて使用し、parseUsername が true に設定されている場合にのみ考慮されます。	<b>`\${AUTH_LDAP_USERNAME_BEGIN_STRING}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_USERNAME_END_STRING</b>	ユーザー名を公開するため、DN の最後から削除される文字列を定義します。このオプションは usernameEndString と合わせて使用し、parseUsername が true に設定されている場合にのみ考慮されます。	<b>`\${AUTH_LDAP_USERNAME_END_STRING}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID</b>	ユーザーロールを含む属性の名前。	<b>`\${AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_ROLE_S_CTX_DN</b>	ユーザーロールを検索するコンテキストの固定 DN。これは、実際のロールが存在する DN ではなく、ユーザーロールを含むオブジェクトが存在する DN です。たとえば、Microsoft Active Directory サーバーでは、これは、ユーザーアカウントが存在する DN です。	<b>`\${AUTH_LDAP_ROLE_S_CTX_DN}`</b>

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b>AUTH_LDAP_ROLE_FILTER</b>	認証済みユーザーと関連付けられたロールを検索するために使用される検索フィルター。{0} 式を使用しているフィルターに、入力ユーザー名、またはログインモジュールコールバックから取得した userDN が置換されます。認証済み userDN は {1} が使用されたフィルターに置き換えられます。入力ユーザー名に一致する検索フィルター例は (member={0}) です。認証済み userDN に一致する他の例は (member={1}) です。	<b>`\${AUTH_LDAP_ROLE_FILTER}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION</b>	ロール検索が一致するコンテキストで行われる再帰のレベル数。再帰を無効にするには、これを 0 に設定します。	<b>`\${AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE</b>	認証された全ユーザーに対して含まれるロール	<b>`\${AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE}`</b>
	<b>AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID</b>	ロール名を含む roleCtxDN コンテキスト内の属性の名前。roleAttributelsDN プロパティを true に設定すると、このプロパティはロールオブジェクトの名前属性の検索に使用されます。	<b>`\${AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID}`</b>

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b>AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN</b>	クエリーによって返された DN に roleNameAttributeID が含まれるかどうかを示すフラグ。true に設定した場合には、DN は roleNameAttributeID に対してチェックされます。false に設定すると、DN は roleNameAttributeID に対して確認されません。このフラグは LDAP クエリーのパフォーマンスを向上できます。	<b>\${AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN}</b>
	<b>AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN</b>	roleAttributeID にロールオブジェクトの完全修飾 DN が含まれるかどうか。false の場合は、コンテキスト名の roleNameAttributeID 属性の値からこのロール名が取得されます。Microsoft Active Directory などの特定のディレクトリースキーマでは、この属性を true に設定する必要があります。	<b>\${AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN}</b>
	<b>AUTH_LDAP_REFERRAL_USER_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK</b>	リファール (referral) を使用しない場合はこのオプションを使用する必要はありません。リファールを使用し、ロールオブジェクトがリファール内部にあると、このオプションは特定のロール (例: member) に対して定義されたユーザーが含まれる属性名を示します。ユーザーはこの属性名の内容に対して確認されます。このオプションが設定されていないとチェックは常に失敗するため、ロールオブジェクトはリファールツリーに保存できません。	<b>\${AUTH_LDAP_REFERRAL_USER_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK}</b>

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b>AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES</b>	このパラメーターがある場合には、RoleMapping のログインモジュールで、指定したファイルを使用するように設定します。このプロパティは、ロールを置換ロールに対してマップするプロパティファイルまたはリソースの完全修飾ファイルパスまたはファイル名を定義します。形式は original_role=role1,role2,role3 になります。	<b>`\${AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES}`</b>
	<b>AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE</b>	現在のロールを追加するか、マップされたロールに現在のロールを置き換えるか。true に設定した場合は、置き換えられません。	<b>`\${AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE}`</b>
<b>`\${APPLICATION_NAME}`-kieserver</b>	<b>DROOLS_SERVER_FILTER_CLASSES</b>	KIE Server のクラスフィルター (org.drools.server.filter.classes システムプロパティを設定)	<b>`\${DROOLS_SERVER_FILTER_CLASSES}`</b>
	<b>KIE_ADMIN_USER</b>	KIE 管理者のユーザー名	<b>`\${KIE_ADMIN_USER}`</b>
	<b>KIE_ADMIN_PWD</b>	この試用版の環境でユーザーが簡単に試用できるように、複数のコンポーネントで使用されるデフォルトのパスワード	<b>`\${DEFAULT_PASSWORD}`</b>
	<b>KIE_MBEANS</b>	KIE Server の mbeans の有効化/無効化 (システムプロパティ kie.mbeans および kie.scanner.mbeans を設定)。	<b>`\${KIE_MBEANS}`</b>
	<b>KIE_SERVER_BYPASS_AUTH_USER</b>	KIE サーバーのバイパス認証ユーザー (org.kie.server.bypass.auth.user システムプロパティを設定します)	<b>`\${KIE_SERVER_BYPASS_AUTH_USER}`</b>

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b>KIE_SERVER_CONTROLLER_USER</b>	KIE サーバーのコントローラーのユーザー名 (org.kie.server.controller.user システムプロパティを設定します)	<b>\${KIE_SERVER_CONTROLLER_USER}</b>
	<b>KIE_SERVER_CONTROLLER_PWD</b>	この試用版の環境でユーザーが簡単に試用できるように、複数のコンポーネントで使用されるデフォルトのパスワード	<b>\${DEFAULT_PASSWORD}</b>
	<b>KIE_SERVER_CONTROLLER_SERVICE</b>	–	<b>\${APPLICATION_NAME}-rhdmcen</b>
	<b>KIE_SERVER_CONTROLLER_PROTOCOL</b>	–	ws
	<b>KIE_SERVER_ID</b>	–	<b>\${APPLICATION_NAME}-kieserver</b>
	<b>KIE_SERVER_ROUTE_NAME</b>	–	<b>\${APPLICATION_NAME}-kieserver</b>
	<b>KIE_SERVER_USER</b>	KIE サーバーのユーザー名 (org.kie.server.user システムプロパティを設定します)	<b>\${KIE_SERVER_USER}</b>
	<b>KIE_SERVER_PWD</b>	この試用版の環境でユーザーが簡単に試用できるように、複数のコンポーネントで使用されるデフォルトのパスワード	<b>\${DEFAULT_PASSWORD}</b>
	<b>KIE_SERVER_CONTAINER_DEPLOYMENT</b>	KIE サーバーコンテナのデプロイメント設定。形式: containerId=groupId:artifactId:version	c2=g2:a2:v2
	<b>\${KIE_SERVER_CONTAINER_DEPLOYMENT}</b>	<b>MAVEN_REPOS</b>	–
	RHDMCENTR,EXTERNAL	<b>RHDMCENTR_MAVEN_REPO_SERVICE</b>	–

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr</code>	<code>RHDMCENTR_MAVEN_REPO_PATH</code>	–
	<code>/maven2/</code>	<code>RHDMCENTR_MAVEN_REPO_USERNAME</code>	EAP 内の Decision Central がホストする Maven サービスにアクセスするためのユーザー名
	<code>\${DECISION_CENTRAL_MAVEN_USERNAME}</code>	<code>RHDMCENTR_MAVEN_REPO_PASSWORD</code>	この試用版の環境でユーザーが簡単に試用できるように、複数のコンポーネントで使用されるデフォルトのパスワード
	<code>\${DEFAULT_PASSWORD}</code>	<code>EXTERNAL_MAVEN_REPO_ID</code>	maven リポジトリに使用する id (設定されている場合)。デフォルトは無作為に作成されます。
	<code>\${MAVEN_REPO_ID}</code>	<code>EXTERNAL_MAVEN_REPO_URL</code>	Maven リポジトリまたはサービスへの完全修飾 URL。
	<code>\${MAVEN_REPO_URL}</code>	<code>EXTERNAL_MAVEN_REPO_USERNAME</code>	Maven リポジトリにアクセスするユーザー名 (必要な場合)
	<code>\${MAVEN_REPO_USERNAME}</code>	<code>EXTERNAL_MAVEN_REPO_PASSWORD</code>	Maven リポジトリにアクセスするパスワード (必要な場合)。
	<code>\${MAVEN_REPO_PASSWORD}</code>	<code>SSO_URL</code>	RH-SSO URL
	<code>\${SSO_URL}</code>	<code>SSO_OPENIDCONNECT_DEPLOYMENTS</code>	–
	<code>ROOT.war</code>	<code>SSO_REALM</code>	RH-SSO レalm 名。
	<code>\${SSO_REALM}</code>	<code>SSO_SECRET</code>	KIE Server の RH-SSO クライアントシークレット
	<code>\${KIE_SERVER_SSO_SECRET}</code>	<code>SSO_CLIENT</code>	KIE Server の RH-SSO クライアント名。

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<code>\${KIE_SERVER_SSO_CLIENT}</code>	<b>SSO_USERNAME</b>	クライアント作成に使用する RH-SSO レルムの管理者のユーザー名 (存在しない場合)
	<code>\${SSO_USERNAME}</code>	<b>SSO_PASSWORD</b>	クライアント作成に使用する RH-SSO レルムの管理者のパスワード。
	<code>\${SSO_PASSWORD}</code>	<b>SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION</b>	RH-SSO が無効な SSL 証明書の検証。
	<code>\${SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION}</code>	<b>SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE</b>	ユーザー名として使用する RH-SSO プリンシパル属性
	<code>\${SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE}</code>	<b>HOSTNAME_HTTP</b>	http サービスルートのカスタムホスト名。デフォルトホスト名の場合には空白にします (例: <application-name>-kieserver-<project>.<default-domain-suffix>)。
	<code>\${KIE_SERVER_HOSTNAME_HTTP}</code>	<b>AUTH_LDAP_URL</b>	認証用に接続する LDAP エンドポイント
	<code>\${AUTH_LDAP_URL}</code>	<b>AUTH_LDAP_BIND_DN</b>	認証に使用するバインド DN。
	<code>\${AUTH_LDAP_BIND_DN}</code>	<b>AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL</b>	認証に使用する LDAP の認証情報。
	<code>\${AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL}</code>	<b>AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN</b>	パスワードの復号に使用する JaasSecurityDomain の JMX ObjectName。
	<code>\${AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN}</code>	<b>AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN</b>	ユーザー検索を開始する最上位コンテキストの LDAP ベース DN

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b><code>\${AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN}</code></b>	<b>AUTH_LDAP_BASE_FILTER</b>	認証するユーザーのコンテキストの検索に使用する LDAP 検索フィルター。{0} 式を使用しているフィルターに、入力ユーザー名、またはログインモジュールコールバックから取得した userDN が置換されます。検索フィルター一般的な例は (uid={0}) です。
	<b><code>\${AUTH_LDAP_BASE_FILTER}</code></b>	<b>AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE</b>	使用する検索範囲。
	<b><code>\${AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE}</code></b>	<b>AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT</b>	ユーザーまたはロールの検索のタイムアウト (ミリ秒単位)。
	<b><code>\${AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT}</code></b>	<b>AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE</b>	ユーザーの DN を含むユーザーエンタリイの属性の名前。これは、ユーザー自身の DN に正しいユーザーマッピングを妨げる特殊文字 (バックスラッシュなど) が含まれる場合に必要になることがあります。属性が存在しない場合は、エンタリイの DN が使用されます。
	<b><code>\${AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE}</code></b>	<b>AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME</b>	DN がユーザー名に対して解析されるかどうかを示すフラグ。true に設定した場合には、DN はユーザー名に対して解析されます。false に設定した場合には、DN はユーザー名に対して解析されません。このオプションは、usernameBeginString および usernameEndString とともに使用されます。



デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b>`\${AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME}`</b>	<b>AUTH_LDAP_USERNAME_BEGIN_STRING</b>	ユーザー名を公開するため、DNの最初から削除される文字列を定義します。このオプションは usernameEndString と合わせて使用し、parseUsername が true に設定されている場合のみ考慮されます。
	<b>`\${AUTH_LDAP_USERNAME_BEGIN_STRING}`</b>	<b>AUTH_LDAP_USERNAME_END_STRING</b>	ユーザー名を公開するため、DNの最後から削除される文字列を定義します。このオプションは usernameEndString と合わせて使用し、parseUsername が true に設定されている場合のみ考慮されます。
	<b>`\${AUTH_LDAP_USERNAME_END_STRING}`</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID</b>	ユーザーロールを含む属性の名前。
	<b>`\${AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID}`</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_SCTX_DN</b>	ユーザーロールを検索するコンテキストの固定 DN。これは、実際のロールが存在する DNではなく、ユーザーロールを含むオブジェクトが存在する DNです。たとえば、Microsoft Active Directory サーバーでは、これは、ユーザーアカウントが存在する DNです。

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b>`\${AUTH_LDAP_ROLE_CTX_DN}`</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_FILTER</b>	認証済みユーザーと関連付けられたロールを検索するために使用される検索フィルター。{0} 式を使用しているフィルターに、入力ユーザー名、またはログインモジュールコールバックから取得した userDN が置換されます。認証済み userDN は {} が使用されたフィルターに置き換えられます。入力ユーザー名に一致する検索フィルター例は (member={0}) です。認証済み userDN に一致する他の例は (member={}) です。
	<b>`\${AUTH_LDAP_ROLE_FILTER}`</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION</b>	ロール検索が一致するコンテキストで行われる再帰のレベル数。再帰を無効にするには、これを 0 に設定します。
	<b>`\${AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION}`</b>	<b>AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE</b>	認証された全ユーザーに対して含まれるロール
	<b>`\${AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE}`</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID</b>	ロール名を含む roleCtxDN コンテキスト内の属性の名前。roleAttributelsDN プロパティを true に設定すると、このプロパティはロールオブジェクトの名前属性の検索に使用されます。

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b>`\${AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID}`</b>	<b>AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN</b>	クエリーによって返された DN に roleNameAttributeID が含まれるかどうかを示すフラグ。true に設定した場合には、DN は roleNameAttributeID に対してチェックされます。false に設定すると、DN は roleNameAttributeID に対して確認されません。このフラグは LDAP クエリーのパフォーマンスを向上できます。
	<b>`\${AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN}`</b>	<b>AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN</b>	roleAttributeID にロールオブジェクトの完全修飾 DN が含まれるかどうか。false の場合は、コンテキスト名の roleNameAttributeID 属性の値からこのロール名が取得されます。Microsoft Active Directory などの特定のディレクトリースキーマでは、この属性を true に設定する必要があります。

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	<b><code>\${AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN}</code></b>	<b>AUTH_LDAP_REFERRAL_USER_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK</b>	リファーラル (referral) を使用しない場合はこのオプションを使用する必要はありません。リファーラルを使用し、ロールオブジェクトがリファーラル内部にあると、このオプションは特定のロール (例: member) に対して定義されたユーザーが含まれる属性名を示します。ユーザーはこの属性名の内容に対して確認されます。このオプションが設定されていないとチェックは常に失敗するため、ロールオブジェクトはリファーラルツリーに保存できません。
	<b><code>\${AUTH_LDAP_REFERRAL_USER_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK}</code></b>	<b>AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES</b>	このパラメーターがある場合には、RoleMapping のログインモジュールで、指定したファイルを使用するように設定します。このプロパティは、ロールを置換ロールに対してマップするプロパティファイルまたはリソースの完全修飾ファイルパスまたはファイル名を定義します。形式は original_role=role1,role2,role3 になります。
	<b><code>\${AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES}</code></b>	<b>AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE</b>	現在のロールを追加するか、マップされたロールに現在のロールを置き換えるか。true に設定した場合は、置き換えられません。
	<b><code>\${AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE}</code></b>	<b>FILTERS</b>	—

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	AC_ALLOW_ORIGIN,AC_ALLOW_METHODS,AC_ALLOW_HEADERS,AC_ALLOW_CREDENTIALS,AC_MAX_AGE	<b>AC_ALLOW_ORIGIN_FILTER_RESPONSE_HEADER_NAME</b>	–
	Access-Control-Allow-Origin	<b>AC_ALLOW_ORIGIN_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE</b>	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Origin 応答のヘッダーの値を設定します (CORS サポートに有用)
	<b>#{KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_ORIGIN}</b>	<b>AC_ALLOW_METHODS_FILTER_RESPONSE_HEADER_NAME</b>	–
	Access-Control-Allow-Methods	<b>AC_ALLOW_METHODS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE</b>	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Methods 応答のヘッダーの値を設定します (CORS サポートに有用)
	<b>#{KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_METHODS}</b>	<b>AC_ALLOW_HEADERS_FILTER_RESPONSE_HEADER_NAME</b>	–
	Access-Control-Allow-Headers	<b>AC_ALLOW_HEADERS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE</b>	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Headers 応答のヘッダーの値を設定します (CORS サポートに有用)
	<b>#{KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_HEADERS}</b>	<b>AC_ALLOW_CREDENTIALS_FILTER_RESPONSE_HEADER_NAME</b>	–
	Access-Control-Allow-Credentials	<b>AC_ALLOW_CREDENTIALS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE</b>	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Credentials 応答のヘッダーの値を設定します (CORS サポートに有用)
	<b>#{KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_CREDENTIALS}</b>	<b>AC_MAX_AGE_FILTER_RESPONSE_HEADER_NAME</b>	–

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	Access-Control-Max-Age	<b>AC_MAX_AGE_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE</b>	KIE サーバーの Access-Control-Max-Age 応答のヘッダーの値を設定します (CORS サポートに有用)

#### 4.1.2.4. 外部の依存関係

##### 4.1.2.4.1. シークレット

このテンプレートでは、アプリケーションを実行するために以下のシークレットをインストールする必要があります。

## 4.2. OPENSIFT の使用に関するクイックリファレンス

Red Hat OpenShift Container Platform で Red Hat Decision Manager テンプレートのデプロイ、モニターリング、管理、デプロイ解除するには、OpenShift Web コンソールまたは **oc** コマンドを使用できます。

Web コンソールの使用に関する説明は、[Web コンソールを使用したイメージの作成およびビルド](#) を参照してください。

**oc** コマンドの使用方法に関する詳細は、[CLI リファレンス](#) を参照してください。次のコマンドが必要になる可能性があります。

- プロジェクトを作成するには、以下のコマンドを使用します。

```
$ oc new-project <project-name>
```

詳細は、[CLI を使用したプロジェクトの作成](#) を参照してください。

- テンプレートをデプロイするには (またはテンプレートからアプリケーションを作成するには)、以下のコマンドを実行します。

```
$ oc new-app -f <template-name> -p <parameter>=<value> -p <parameter>=<value> ...
```

詳細は、[CLI を使用したアプリケーションの作成](#) を参照してください。

- プロジェクト内のアクティブな Pod の一覧を表示するには、以下のコマンドを使用します。

```
$ oc get pods
```

- Pod のデプロイメントが完了し、実行中の状態になっているかどうかなど、Pod の現在のステータスを表示するには、以下のコマンドを使用します。

```
$ oc describe pod <pod-name>
```

**oc describe** コマンドを使用して、他のオブジェクトの現在のステータスを表示できます。詳細は、[アプリケーションの変更操作](#) を参照してください。

- Pod のログを表示するには、以下のコマンドを使用します。

```
$ oc logs <pod-name>
```

- デプロイメントログを表示するには、テンプレートリファレンスで **DeploymentConfig** の名前を検索して、以下のコマンドを実行します。

```
$ oc logs -f dc/<deployment-config-name>
```

詳細は、[デプロイメントログの表示](#) を参照してください。

- ビルドログを表示するには、テンプレートリファレンスで **BuildConfig** の名前を検索して、以下のコマンドを実行します。

```
$ oc logs -f bc/<build-config-name>
```

詳細は、[ビルドログのアクセス](#) を参照してください。

- アプリケーションの Pod をスケーリングするには、テンプレートリファレンスで **DeploymentConfig** の名前を検索して、以下のコマンドを実行します。

```
$ oc scale dc/<deployment-config-name> --replicas=<number>
```

詳細は、[手動スケーリング](#) を参照してください。

- アプリケーションのデプロイメントを解除するには、以下のコマンドを使用してプロジェクトを削除します。

```
$ oc delete project <project-name>
```

または、**oc delete** コマンドを使用して、Pod またはレプリケーションコントローラーなど、アプリケーションの一部を削除できます。詳細は、[アプリケーションの修正操作](#) を参照してください。

## 付録A バージョン情報

本書の最終更新日: 2021年11月15日(月)